

2025/12/23 18:00
second poevel

風花夜

KAZAHANAYA

月が出ていたんだ
星だってでていたよ
でもね雪が降っていたんだ
こんな夜を風花夜って
呼ぶんだってさ。

作 飛鳥世一

目次

はじめに	1
イブのあの日	2
謝辞	15

はじめに

2025年もあとわずかとなって参りました。
ここを訪れていただいた皆様におかれましては、さぞや充実した素晴らしい1年になられたものと心よりお慶び申し上げます。

他方で、世間に目を移せば相変わらずと申しますか右も左も代り映えせぬ状況が続いています。今年も日本は自然災害が多発。この歳の瀬を前に未だ元の暮らしぶりに戻れぬ人たちも多い状況。

1日も早く落ち着いた生活を取り戻されること祈らずにはおれません。

さて本作。ポエベルというジャンルを自ら記して以来の2作目となります。一方で、ヴァニタスという作品を仕上げている中でのことでしたから、正直なところ「書けるのだろうか」という思いも強く働いたものでしたが、書きはじめてみると思いの外、筆も伸び予定より随分早く脱稿しました。

話しの半ばが書き過ぎ感が強く削っても良いかとも考えましたが、最後の「効き」を考えたときに無駄も無かろうとの結着をみるに至り原稿は削らず推敲のみと留めた次第です。

お陰様で、ここで作品を上げはじめ全部で20本ほどになって参りました。

まだアップロードしていない作品も2本ほど眠らせております。七日 nanoka の仕上げも待っています。チョットでも書けるうちに書いておかなければなりません。

どうかここを可愛がって頂けている皆様お一人お一人におかれましては、引き続き倍旧に増しますご厚情のほど賜りますようお願い申し上げます。

皆様お一人お一人にとりまして2026年が多幸に彩られた実り多き歳となりますこと心よりお祈り申し上げます。

気に入ったら宣伝してね♪ これはチョットどうなのよってさ。一回読んでみ♪ってね(笑)

2025年12月吉日

飛鳥世一

イブのあの日

イブのあの日

・・・・・・・・・・・・・・・・

初雪が降ったんだ

シンシンと音もさせずに降っているよ

不思議な夜なんだ

絵に画いたならどうなるだろう

宙には月も星もでているのに雪が降ってるんだ「風花」って呼ぶんだよ素敵でしょう夜だから「風花夜

(かざはなや)」になるのだろうね……憶えてるだろうかあの夜の……

風は吹いてるのかって？

静かなものだよ……今は

クリスマスイブだもの

願の一つぐらいいは届くでしょう？

想い出にひたるぐらいいは叶えてほしいね想い出ぐらいいしか今の僕には残ってないしどうしてだろう？ 抜

け落ちてる時刻(とき)があつてさ

凍(しば)れた葡萄の房から葡萄がポロポロ抜け落ちるようにさ

寒くはないかい？

着るものは足りているのかい？

上着を持たせてなかったね

ねぇ憶えてる？

子供の頃のクリスマス……お米すら満足に食べられなかったあの頃冬に電気が止まりガスも止まりしたあの頃それでもさ今もこうして生きてるよ石炭ストーブを家族四人で囲みながら食べたジャガバターはご馳走だったあの味を今は味わえないのが寂しいよ

あゝ

今ね

ウィーンの画家の画集でさ

画を見てたんだ

もみの森っていう画をさ

画いたのは

金色をたくさん使う画家さんでね

クリムトって云うんだ

珍しいみたいだよ自然を画いた

この手の作品は

あのね……

色合いはくすんだ茶色と……えんじ色

つるつぽげなんだ木も枝も葉っぱが無いのさ

消し飛んだように……緑がない枯れたみたいにさ

もみの木の森の画なのにそれもみの木さ……



スクリーンショット 2025.12.08 18:43:22.png

あの日の……イブの夜……Xmasイブの夜……聖・聖夜
……想い出の夜

かあちゃん……聞いてみるかい？……苦しいながらも……

世界で一番幸せだった……想い出の夜の話を一人語りになるけれど……

※ここまで凡て韻文(母音あいうえお順)



少年は町でたった一つのスーパーの前にいました

スーパーの入り口は賑やかに装飾されています

今日はクリスマス・イブでした

金色のボール球

銀色のボール球

赤いボール球

お店の入り口を飾るモールの帯は

赤青黄色の電飾が施されチカチカと瞬いていました

少年は夕刊の配達を終えたばかりでした

外は凍えるほどの寒さです

小さくて着れなくなったセーターを

かあちゃんが解いて編んだボッコ手袋

そこだけが汗をかくほどぬくぬくでした

少年は中々お店に入りません

お店の飾り付けを眺めていました

夕刊を配達しながら目にした家々

窓辺にはクリスマスツリーの電飾が温かそうに灯っていました

下から上へと上から下へと

電気の川がながれます

配達先の友達の家にも灯っていました

嫌いなやつの家にも灯っていました

中には少年の背丈よりも大きなツリーもありました

「サンタクロースなんかいないのに」

「真っ赤なお鼻のトナカイなんかいないのに」

「キリストだってしんだのに」
少年は口ずさみながら新聞を配りました
下瞼と目じりがセロハンテープを貼ったように
なんだかパリパリしています
顔がつっぱりはじめていました
涙が凍ってぱりぱりしてます
寒かったのでしょうか
それとも……

配達が終わると町で一軒だけのスーパーへと立ち寄ったのです
少年はやっとスーパーの中へと入りました
ここにも大きなツリーが飾ってありました
ツリーの下では販売用のツリーが売られていました
入り口にはケーキが山積みでした
鶏の丸焼きの匂いが少年の足をとめました
足がひとりでに鶏の丸焼きコーナーへと……
少年は一生懸命に通路を右へと折れました
「サンタクロースは俺たべよ」
「真っ赤なお鼻のトナカイだって俺のチャリンコだべよ」
「キリストなんかいらねべよ」
少年は雑貨コーナーへと向かっていたようです

足を止めたのは灰皿コーナー
ガラスの灰皿
透き通ったガラスの灰皿ばかりでした
おおきなものは買えそうにありませんでした
高かったのです
少年は小さな灰皿を探しました
みつめました
活劇もののヒーローの目ん玉ぐらいの灰皿を
赤い灰皿
青い灰皿
ふたつで千円
箱もついてました
チリ紙を固めたような箱
鼠色の箱がもの悲しさを少年に運びます

「綺麗じゃないなあ」

レジに行くとお姉さんにプレゼントの包装をお願いします

「クリスマスプレゼント？ サンタさんだね」

お姉さんはそう云いながら包みます

「……サンタなんかいないべや」少年は声に出して言いました

「……そっかぁーいないんだ……」お姉さんは優しく少年をみて言葉にします

お店の時計はもう5時を指していました

少年は雪道を自転車立ちこぎで急いで家に帰ります

後輪タイヤのカバーは割れていました

壊れた自転車

少年の夢は新しい自転車を買うこと

自分で買うこと

また下瞼と目じりがセロハンテープを貼ったように

なんだかパリパリしてきました

顔がつっぱりはじめてきました

涙が凍ってぱりぱりしてきます

でもほんの少し楽しみだったようです

「プレゼント喜ぶかなあ」と

家に帰ると少年は両親へのプレゼントを下駄箱に隠しました

その足で玄関を飛び出すと

雪で埋まったアスパラ畑をこぎはじめました

膝まで雪で埋まったアスパラ畑

息を切らしながらホッホッと雪をこいでゆきました

目の前には真っ黒な防風林が横たわっていました

お化けのようで恐ろしく

何かができそうです

「なまらこえー(怖い)べよ」

少年は防風林の前にして呟きます

風も吹いてきました

雪も降っています

ただ月と星は少年を見守るように雪原を薄っすら照らしていました

少年は勇気を振り絞ると防風林へとわけ入ります

真っ暗でした

玄関から持ってきた懐中電灯をつけると

少年は防風林の中

雪をこいでわけ入ります

懐中電灯は足元だけが明るいのです

周りは真っ暗です

懐中電灯を周りの樹々に照らすとお化けのようで恐ろしく思えました

目先の樹々のあしもとを照らすと

なんでしょう

点々と等間隔に雪の上に穴が開いています

『野ウサギ？ キタキツネ？』

少年は懐中電灯を空に向けてみました

風に揺れる樹々がまるで生きているように右へ左へ

『星？ 月？ 雪？』そう呟くと空に向けていた懐中電灯を消しました

真っ暗でした

本当に真っ暗

雪が天上から降ってきます

樹々に積もった雪たちが

風に煽られ堕ちてきます頭の上からドンと

暗闇に目が慣れてきました

懐中電灯をつけているときには見えなかったものが

見えるようになってきました

樹々の間を埋めた雪に穿たわれた動物の足跡もはっきり見えます

真白い雪が時おりチカチカ点滅します

樹々が被った綿帽子も時おりチカチカ点滅します

サルオガセもキラキラ輝くのです

天の空

揺れる樹々の隙間から

星と月がその灯りを洩らします

洩れた光が雪景色を映し出すのでした

少年には「クリスマスツリー」のように見えました

「サンタクロースはいねえべよー」

「真っ赤なお鼻のトナカイなんかいねえべよー」

「キリストだってしんだべよー」

「……クリスマスツリーみたいだっきゃさ」

少年は闇に浮かび上がる防風林に幻想的なツリーをみたのでした

雪景色2.jpg



月も星も見えたり隠れたり樹々がざわめき
ざわめくたびに雪を落しましたドンドサッ
少年は急いで手ごろな枝を探します

「下を向くのがエゾ松でーどーでもエエゾのエゾ松で」

「上を向くのがトドマツでー天までトドけのトドマツでえ」

怖かったのでしょう

寒かったのでしょう

少年は歌を謳いながら枝ぶりの良い木を探します

丁度、少年の背の高さ

腕を伸ばした辺りに手ごろな枝を見つけました
でも、落葉樹なので葉っぱは付いていませんでした

「はだかだべ」

「家にあるものなんか飾るべし」

少年は大きな枝を体重をかけてへし折りました
パキン〜と大きな音が防風林に響きます

少年は枝を引き摺ってアスパラ畑をこいでゆきました
かあちゃんもとうちゃんも帰ってきていませんでした

家に帰りつくと少年は弟を呼びました

「うべー、ちょっと手伝ってくれ〜」と

少年は弟に指示を出すと配達で余った新聞を広げて切り出しました
細く長く細く長く細く長く何本も何枚も

切り出すと少年はそれを枝に巻き付けたり

それを枝に垂らしたり

枝の下には懐中電灯を上向きに縛り付けました

スイッチをつけると枝に巻き付けられた新聞が照らし出されます

「うべー、ちょっと電気消してくれえ」

真っ暗な中、懐中電灯が照らし出した「新聞ツリー」の完成です
弟と一緒に枝の所々にメッセージを書いた紙を貼り付けました
かあちゃんへ……
とうちゃんへ……

天のキリストさんへ……

「自転車を買えますよう」にと

とうちゃんとかあちゃんが一緒に帰って来ました

少年は新聞ツリーを隠していました

「メシだメシ！」とうちゃんがさういうと

かあちゃんが買ってきたものをテーブルに並べます

鶏の丸焼きがありました

弟の好きなザンギもありました

そしてケーキとお寿司

少年はテーブルをみると一つの心配が擡げてきたのです

「確か米が無かったはずなのに」

「明日のコメは大丈夫？」と

無用な心配でした

ちゃんとお米もありました

ご飯を食べ終わるととうちゃんがクリスマスケーキに蠟燭を灯しました

「うべ、電気消せ」とうちゃんがさういうと部屋は真っ暗です

少年は隠していた新聞ツリーをだしました

懐中電灯をつけて

新聞ツリーをだしました

「……なんなのさ……それ、ツリーだってかい？」かあちゃん

「……ツリー……っていうより……七夕だべな」とうちゃん

うべが蠟燭を吹き消すと灯りは新聞ツリーの懐中電灯と真っ赤に焼けた石炭ストーブだけでした
ズルっズルっズルっ……暗闇に鼻をすすする音だけが響きます

「あのね月が出ていたんだ 星だってでていたよ

でもね雪が降っていたんだ

こんな夜を風花夜（かざはなや）って呼ぶんだってさ……」

少年が自慢気に言葉にしました

でも、「風花（かざはな）」という言葉はあるのですが

「かざはなや」という言葉は少年の作ったものでした

少年の大好きな小説集週刊宝石で覚えたものでした

「……ほら、クリスマスのプレゼントだ」

とうちゃんが二人に箱を手渡しました

綺麗な箱でした

便所紙を固めたような箱ではありません……

少年はプレゼントを渡すことが恥ずかしくなりました

綺麗な箱じゃないからと

でも……渡さなきゃと思い直したのです

「じゃあ皆で開けるべ」少年は下駄箱にかくしたプレゼントを

とうちゃんとかあちゃんに渡しました

かあちゃんはひくひくと泣いてました

とうちゃんもぐうぐうってました

皆でプレゼントを開けました

少年がもらったプレゼントは「腕時計」でした

うべが貰ったプレゼントも腕時計でした

黒いベルトの銀色の時計

少年の文字盤には数字ではなくボッコが刻まれたもの

うべの時計は数字が刻まれていました

恰好が良くて少年は気に入りました

「ありがとう」

とうちゃんもかあちゃんも灰皿を喜んでくれていました

「ありがとう」

イブのその夜

少年の家では遅くまで遅くまで楽し気な笑い声が漏れていました

外は風花夜

月も星もでていました

でも風が遠くの山から真白い雪をはこんできました



以下韻文（母音あいいうえお順）

だあれもいなくなったんだよ

いつも一緒だった家族がさ

嬉しい時も

世知辛い時も

米が食えない時も

かあちゃんもとうちゃんもうべも……でもね、でもね
みんな寿命で逝けてよかったよ
羨ましいよ寿命で逝けて

笑顔のあなたたちしか想い出さないのだから
僕の時刻(とき)は笑顔のあの日あの夜でとまってる

あゝ雪が降ってる

彩のついた雪……

黒い雪 灰色の雪 赤い雪 白い雪はきえちまったよ

閃光がドンと落ちたこの夜

とうとう色付いた雪が降る

山の向こうで光ったんだ
気が遠くなるほどの光

生まれてはじめて見る光

生後1カ月ぐらいなのか

子供がはじめて見る光

さっきの光じゃないことを

祈らずにはいられない

月も出ている星もでている

聖夜の雪は白くなけりゃいけないよ

宙には星が瞬いて月があんなに白いのに

「……サンタクロースなんかいないのか」

「真っ赤なお鼻のトナカイなんかいないのか」

「キリストだってしんだのか」

風花夜 KAZAHANAYA

愛しい星には

美しい こんなに美しい言葉あり

永遠をともに誓おう

とこしえに

poetel 風花夜 KAZAHANAYA

真白い雪の永遠を祈って2025年クリスマスに寄せる

令和七年十二月十二日

謝辞

如何でしたでしょうか「風花夜」、考えていたものと違っていれば良いのですが(笑)
ただ、途中で「なんか……ちょっと……」と思える小石を所々に配したつもりです。
最美に拾うべき小石は拾ったつもりですが、「そうきたか。。。」と読んで頂ければ幸甚です



正直なところ随分悩んだのである。
これで良いのか
もっと突き詰めるべきなのかと。

前作のFae Trapでは足元のぐらつきを「はこび」で表現することはできた。
しかし、今回はそれが出来ていない。

「風花夜」という美しい言葉だけで勝負した形になっている。

なんとか読み終わりに「なんだこれは……」というものを創り込もうとしてはみたものの、そういうものが表現できていない。

いや寧ろ当然なのか。

そういうモノは何かこう……突然に降ってくる様な気もしているのだが。

前作Fae Trapの時は「写真」が良い働きをしてくれた。

今回は「絵」の働きを期待して書きはじめてはみたのだが。

書き手の能力的なものだろう。正直「もったいない」作品としてしまった思いが残る。

「タイトル負け」だ。

多分、読者にするのであればタイトルに寄せる期待値が低くは無かったはずなのだ。これは「ヤバそう
だ」と。あの美しいタイトルが突然ガクガクと揺れ始める瞬間を今か今かと待つ。

結果、ズルズルとエンディングを迎える……

はて、この謝辞を書いているうちに何か落ちてきそうになっているのだが、はつきりしない。ただおよそ不確かな何かが「こうしてみたらどうか」と告げ始めている気がするのだが……

チョット謝辞を書くのをここで止めてみよう。
はあ、こういうのは初めてだ。

謝辞を書いているうちに何か落ちてくるというのは初めてである。
これこそ本当に謝辞に価いしそうではある。

休筆 12月11日

結局、読んで頂いたように落とし込んだ次第。

ただ中盤のグラツキを後半に効かせたかったのだが、今一つグラツキを表現しきれていない。先にも書いたことだが「タイトル負け」だ。

タイトルの存在が強くなりすぎたのだろう。

タイトルを主題に関わる間接的なものとしておれば、文中の「風花夜」は金科玉条なる輝きを発したのかもしれない。

ただはじめにつけた「もみの森は星の揺り籠」は陳腐過ぎるのである。

なんだか、祭りの夜店で売っているアクセサリーのようにも思え、二束三文観が駄々洩れであった。こんなことを書けば怒られるかもしれないが小学校中学年がつけそうなタイトルである(笑)

原稿を書きはじめて「あゝ、そういえば、こんな言葉があったなあゝしかし、あれは昼間を形容しての言葉……夜であれば「夜々か」となった。

美しく納まりも良く、ドンガラガッシャンの効きも良いゝそんなところからつけたのだが。

さて、幸せの容は人それぞれであって良いと思う。

ただその容が根を張る場所は「平和」でなければならぬ。

筆者、長らく観光関連事業を生業としてきたが、観光産業は平和産業の最たるもの。平和という前提が機能して初めて人間の交流は生まれる。

自己実現機会ほどそれぞれが幸せを感じられる機会も無いだろう。

こんなものの中であまりイデオロギーに触れたことは書くべきではないのかもしれないが、どんなに小さな幸せでも平和という前提が機能しての幸せだ。

折角だ、日本は、日本が、日本の良いのだが、世界を、世界と、世界にゝ目を移していきたいと思う。今日この頃でもあります。

本稿の感想は、お気軽にお寄せください。

note 中のコメントでも、プロフィール添付のメアドでも結構です。また note のメッセージ機能でも構いません。気付いたこと。感じたこと等お気軽にお寄せいただきますよう。

お一人お一人のあなた様よのお運び、心よ感謝申し上げます。

尚、プレダウンドロード頂けたあなた様13名様への感謝の証として、note、amebroでの完成報告・完成リリースはしばらくいたしません。お一人でお楽しみください(笑)

また、事前の告知リリースで

「こんな……Xmasもあってもいい。

おとなになればひとにやさしくなれるから」としておりますが(笑) ここはひと様の感じようそれぞれと落とし込んでください。こんなクリスマスとはどんなクリスマスを指すのか……

これ以上は書きませんが(笑)

飛鳥世一

PoeVel 『風花夜-KAZAHANAYA』

著 者 飛鳥世一(辻話人〔フル〕)

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
